

熊山遺跡と鑑真和上・秦氏・和気一族のかかわり

岡野 進



熊山山頂の石積遺跡(奈良時代)

私達が住む故里には、千古の歴史がある素晴らしい宝の山である霊峰熊山がそびえる。古代から信仰の山として栄え、7世紀頃には仏教が入り、石積遺跡や寺院を造った人々がいる。

日本の仏教者からの篤い願いに招聘され、中国から渡来した鑑真和上。

熊山の南、香登地区にいた技術者集団秦氏一族。又、熊山の北を流れる吉井川を中心に勢力を拡大した地方豪族、和気氏一族。この3氏集団によって、熊山、山頂に宗教施設が築かれたと伝えられている。

鑑真和上の教授の元、仏教施設が整えられ、又、秦氏一族は高い技術をもって工事を施工。和気一族は広大な山林と寺院の敷地及び資金提供したと考えられている。

鑑真和上は中国、唐の時代の寒山寺の高僧。日本に來られてからは奈良の唐招提寺を創建し、仏法の正統な戒律を整えられました。又彫刻、薬草の知識も深く、日本の文化向上に大きく貢献された。

日本への鑑真和上招来の渡航は難儀を極め、5度失敗して、6度目にやっと、九州に上陸出来ました。そして、一行が奈良の都に上がる途中、備前

の香登に立ち寄られ、秦氏一族と交流、又、熊山にも登られて、北は大山、南は瀬戸内海を超えて四国の山々の絶景を見て、この山が仏教修行にふさわしい霊山と認められたとする鑑真和上と熊山との関連した伝承が残っています。

このほか伝説として、昔から香登の人々に語り継がれているのは、熊山の檜(シキミ)の良い香りを辿って、大滝山から熊山へと鑑真和上が登山され、大滝山福生寺と帝釈山霊仙寺を建立された。そして、頂上に石積戒壇を設けられた。又麓のお寺で檜のお香を造って、帝に献上され、喜ばれた帝から、香登と記す地名を賜った。これらの縁で唐招提寺の和上御影堂の傍らには熊山の檜の木が植えられている。

又お歯黒は鑑真和上より熊山、霊仙寺に伝授され、その後に香登の五寺坊から民間の五軒の家へと製法が伝わって行ったと言う伝承があります。香登お歯黒は江戸期には高級商品として、全国的に名が知れ、販売されています。(香登郷土史お歯黒研究会の研究報告書あり。)

香登の秦氏には、続日本記に「文武天皇二年(702年)倭儒秦大兄に香登臣を賜う」とあります。その頃、大きな力を持った氏集団であったと推察出来ます。

渡来系氏族の秦氏は高度な殖産技術を持った集団でした。鉄、銅等の採鉱、精錬、井戸、池、橋等の土木工事技術。蚕を育てて、高級な絹織物を織る。又、朝鮮半島からの最先端技術で焼かれた須恵器は初め伊部の南、邑久地域で、朝廷へ貢献品として焼かれました。この焼き物造り集団(土師部)も秦氏が深く関係しています。後の時代に須恵器は熊山山中でも焼かれ、鎌倉期以降には、伊部焼の名称で、民営品として日本全国に流通して行きます。

和気一族については、次ぎに、詳しく説明します。